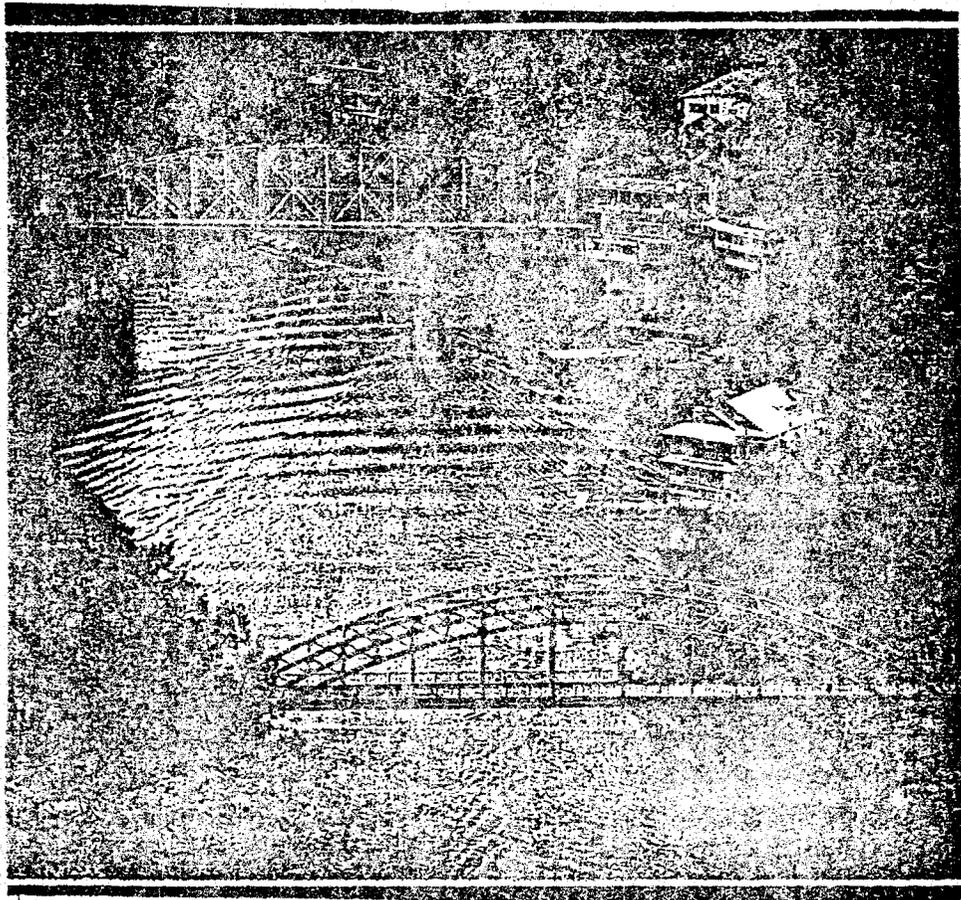


# 帝釈史(遺)跡巡り

59. 6. 24



備陽史探訪の会

帝釈史(遺)跡巡り日程表 59.6.24

発時刻	発地	着時刻	着地	視察内容
8.30	福山市	10.00	神石町	八尾城跡(神石)便
10.30	早久保	11.00	早久保	備後沙
11.20	夏森	11.27	未渡	未広荒神
11.40	未渡	11.46	雨連	平家ノ城
11.55	雨連	12.00	応国院	午食(応国院住職詰)
13.00	応国院	13.15	畑	応国院、因広城、
13.25	畑	13.30	永明寺	未渡合戦、 帝釈橋、畑大蔵官 廿(カ)八(ノ)永明寺、 寄倉岩陰遺跡、 資料館(蒲師小田主)
14.30	資料館	14.50	雄橋	雄橋、唐門
15.00	雄橋	15.30	船車場	
15.30	東船	16.10	犬瀬	船中(神鏡湖一周)
16.10	犬瀬(上陸)	16.20	駐車場	夫不立城、(橋下) 註明
16.25	犬瀬	18.00	福山	国道182号線東城経由

福山 600K 奥平峠 100K 夏森 100K 未渡峠 300K 忘国院 600K 烟  
 200K 永明寺 200K 資料館 200K 岩陰遺跡 040K 高門 080K 雄橋 200K  
 断真蓬 100K 新馬場 900K 犬潮 500K 福山

目次

帝釈峽の位置と石炭岩台地

帝釈峽遺跡群の所在地

入ノ尾城(概測図)

夏森の備後砂

由良系図

未渡合戦

峽谷と遺跡

帝釈峽の鏡乳洞

寄倉山岩陰遺跡

帝釈峽「雄橋」

矢不立城

国境の二本松峠

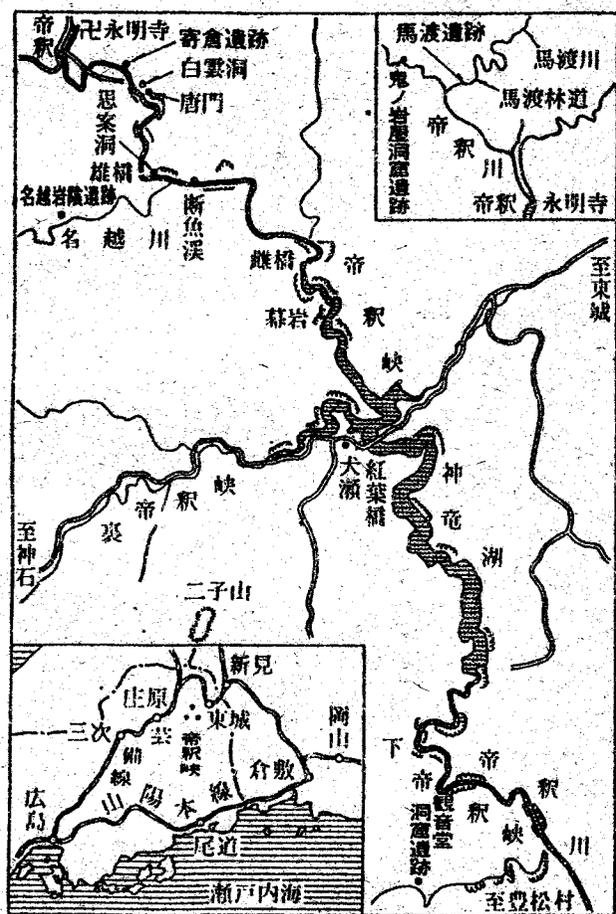
甲(一八尾城) 四(二矢不立城)

二 三 四 四 五 六 九 五 六 一 九 五 二

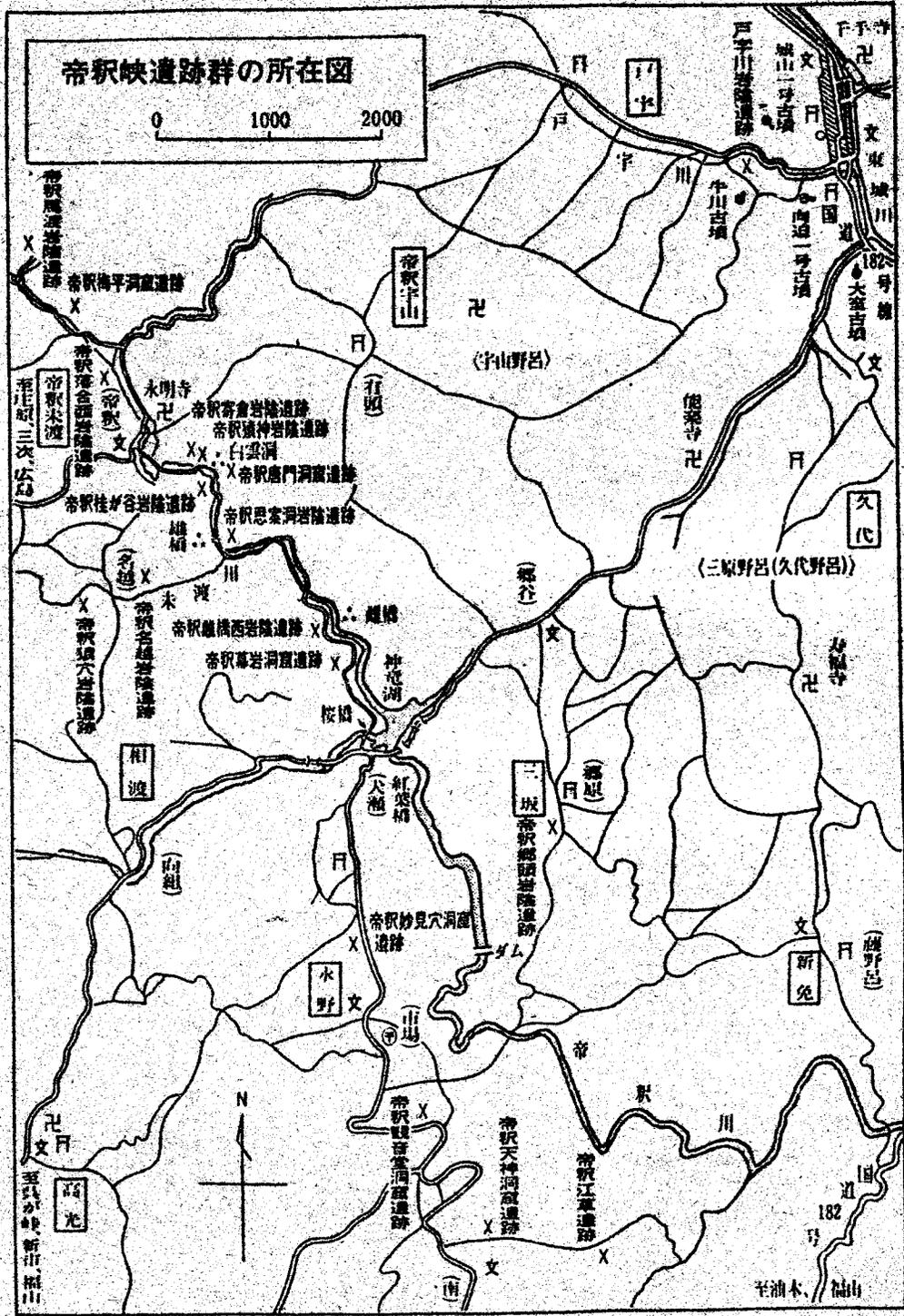
### ● 帝釈峡の位置と石灰岩台地

帝釈峡は広島県の比婆郡、神石郡にまたがる石灰岩の峡谷で、大正12年に国の名勝に指定された景勝である。広島県の東北部に位置するこのあたりには吉備石灰岩台地がのびていて奇巖怪石のカルスト地形が展開している。帝釈石灰岩台地も山口県の秋吉台に劣らない広さと規模をもつが、その中を帝釈川が貫流し、岡山県の高梁川に注いでいる。

帝釈川が水刻しているのが帝釈峡で、古来、文人墨客の杖をひくものがあとを絶たなかった。「山石は怪奇にして神工鬼斧、頂頂はみな石にて屹立すること数百丈なり、石色は純白、瑩然として玉のごとく、これを碎けば鬆々として雪のごとし」と頼杏坪が帝釈廟碑に賦しているのもそのひとつである。文政2年7月、奴可郡未渡村から国郡志のために報告された覚え書に「天地のかけそめしよりうごきなぎちかいを代々にしめす岩室」とあるのは世界の大名橋のひとつに数えられている天然の石灰岩橋の雄橋を歌ったものである。



No. 3 帝釈峡地形図



帝釈峽遺跡群の所在図

0 1000 2000

帝釈宇山

(宇山野呂)

(三原野呂(久代野呂))

三城帝釈總跡遺跡

水野

帝釈天神洞遺跡

帝釈江藤遺跡

至誠少嶋新山福山

約六百年前築城新市

宮氏の居城と伝へるまゝ一ツ尾

西北にある宮尾城の土本

と思はれる。

天文三十二年西城大守城主

官具と盛の攻撃と受入り

高主宮尾京山三本と土本

(何れも新や宮氏毛利系)

して防犯野を退す。

本城は神石町史跡指定

予定。(城跡公園として昭示

五十九年完成計画)

未渡村 (豊東町帝釈未渡)

始終村の東南に位置し、南は神石郡相渡村(現神石町)、

西は甲奴郡五浦村(現湯野町)に接する。村域東部を東南流

する帝釈川は、堤橋のしもで宇山村と相渡村との村境へ

と流れる。一方、村域西端、中央部を東南流する未渡川

は南部の夏森川・土牛川を合わせて名越川となつて西流

し、堤橋近くで帝釈川に合流する。集落はこれらの川の  
曲折部に開けたやや広い谷地と、川沿いの狭い平地の境  
辺に散在。  
村内には縄文・弥生・古墳時代の遺物が出土する。遺物  
が出土する短穴岩陰遺跡・唐門岩陰遺跡・縄文時代の  
の遺物が出土する思案洞・桂が谷・猿神などの岩陰遺跡  
や馬渡上遺跡、古墳時代の須恵器が出る松の木原・大原  
の両遺跡、未渡大仙山第一号古墳など三九基の古墳が確  
認されており、古くから開かれていた地と考えられる。  
村名は、明徳五年(二四九六)四月二日付政盛書状(山内  
首藤家文書)に「未渡村」とみえる。村内宮内神社の永正一  
四年(二五二七)の棟札に「怒母郡東条保未渡村」、大永五年  
(二五二五)に宮出羽守が村内水明寺に寄進した灯台の銘文  
等(国郡志下巻書出製)所収に「備後国奴可郡未渡村」と記  
される。  
元和五年(二六九)の備後国知行帳には「見登村」と記  
され、高四一三石余。正保三年(二六四六)の地誌では畝数  
一三二町余で高五三三石余となり(国郡志下巻書出製)、ほか  
に打籠高が付加されることがあつても基本的にこの数字  
が幕末まで維持された。正保地誌の内訳は、田方二五町  
一反余で二七三石余、田方七七町一反余で二五五石余、  
屋敷七反余で一一石余、切通二七町九反余で二二石余、  
打籠高九斗余(同書出製)。広島藩領で明知。  
西南に御神山(八八九ノト)があるほかはとくに高い  
山もなく、日受けもかなりよく、牧野が広く、村民はゆ  
とりのあるときは荒野を打起して煙草作りに勤んだ。田  
地は本郷にやや広めにあるほかは乏しく、米はだいたい  
不足気味で、三上郡(現庄原市)方面から買求め、麦・粟・  
稗・蕎麦などと混ぜ、粉団子・雑炊・粥などにして食べ  
た。煙草作りは努力がかかるのでほかの稼ぎがでない  
が、そのほかの家では織・大織治屠用の炭を焼いたり、  
砂鉄・炭・鉄および馬刺鉄などを馬背に集めて運んだり  
して収入を得た(国郡志下巻書出製ほか)。「芸藩通志」によ  
れば戸数八〇、人口三三三、牛一四八・馬二五。村内に  
は江戸後半期には荒神山(山)があり、北方の村々から砂鉄  
を輸入して採集していた。村内夏森でとれる結晶質の石

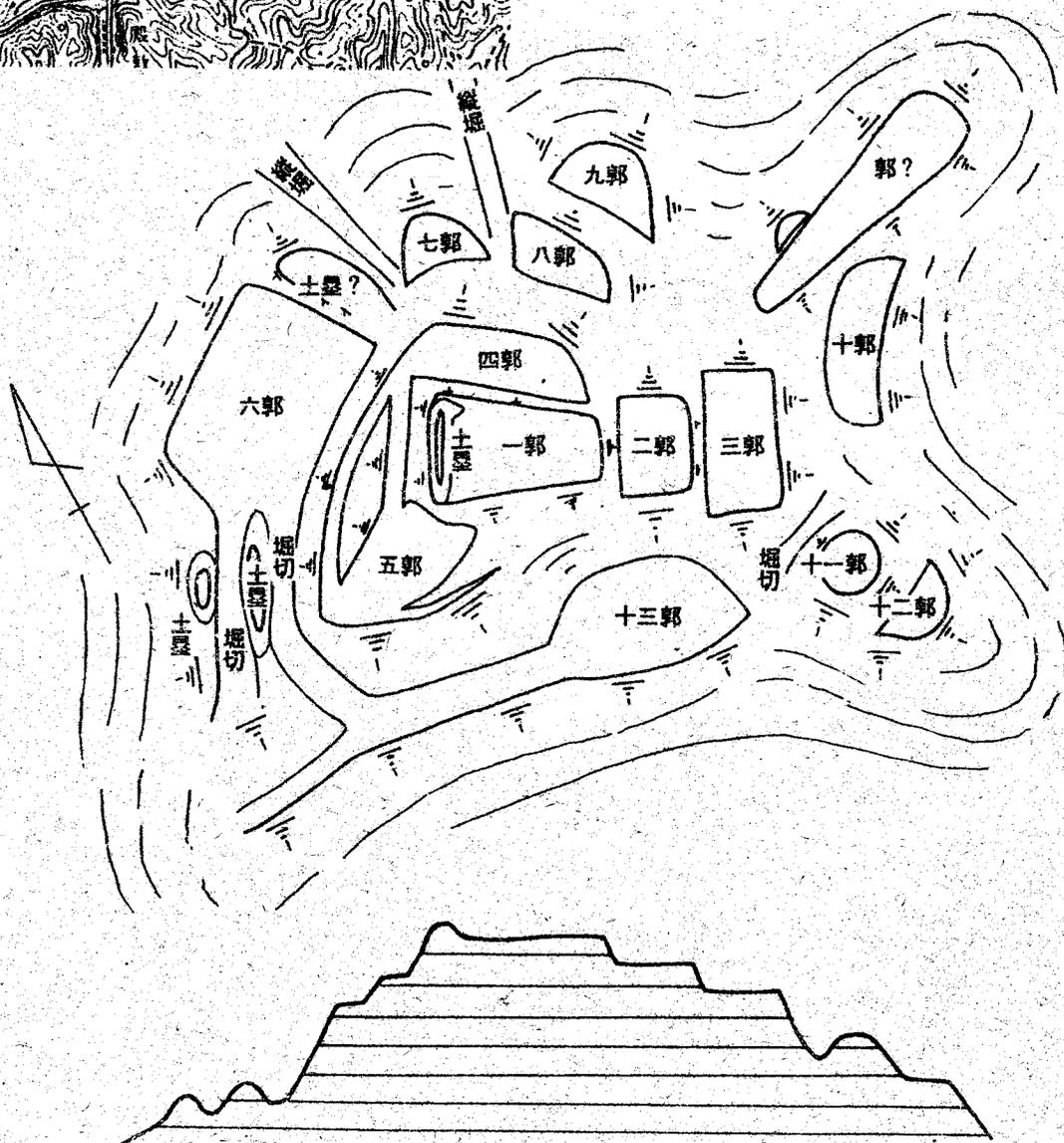
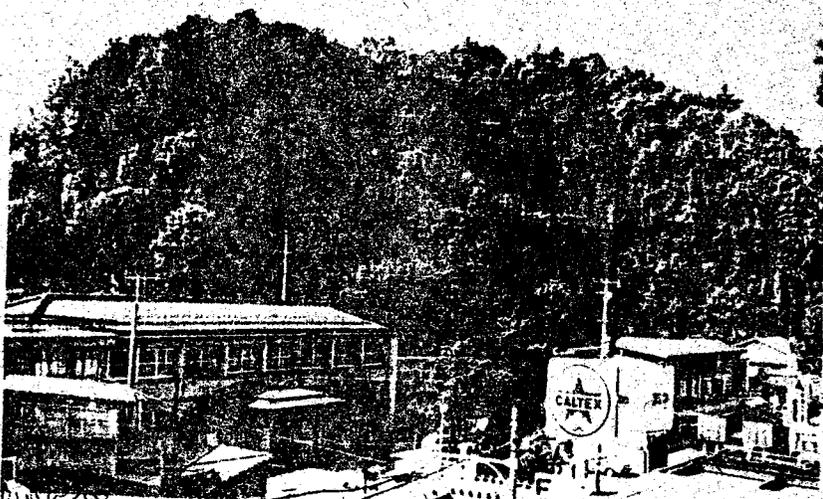
はたはたどりては、備後国に属する。この石とか砂利とよんで、他国からは備後の  
名産として「備後砂」とよばれ、欲石・欲石・欲石・欲石など  
の敷石として用いられた。すでに室町時代には全国的に  
有名で、永禄六年(一五六三)頃の朽木輝孝副状(山内首藤家  
文書)によれば、甲山城(跡地は現庄原市)城主山内隆通が得  
軍足利義輝に太刀一腰、馬一疋とともに備後砂一〇石を  
贈り、義輝から札状が返されている。結晶質石灰質は粒  
状にしないまま磨くと非常に美しいので、中世には五輪  
塔や宝篋印塔の石材として広く用いられた。  
宮内の龜井山に鎮座する宮内神社は素戔嗚命を祀り、  
宮内・因広・藤巻・名越の産土社とされ、社蔵の前記永  
正一四年棟札に「大櫛那藤原朝臣尚盛」と記される。ま  
た本郷の神原に鎮座する八幡神社は息長掛姫命・帶中  
津彦命・品陀和氣命・建速國命を祀り、本郷・夏森・帝  
釈畑・竹渡・川岡・竹河内・土生の産土社とされている。  
寺院は水明寺のほか因広に曹洞宗広國院がある。もと曾  
の徳光寺末で、御神山と号し、本尊は如意輪観音。永禄  
一二年当村の郷土田辺助七因広が開基檀越となり、徳光  
寺六世傳策によつて開創された。  
永明寺 豊東町帝釈未渡

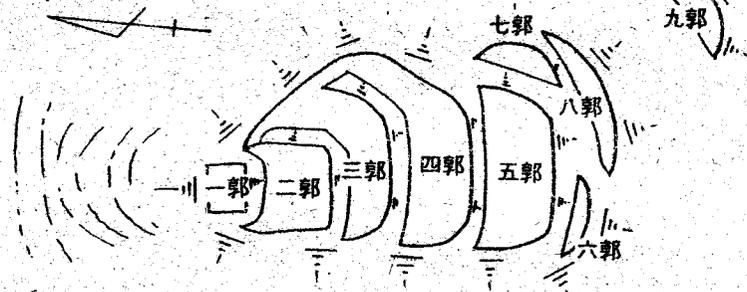
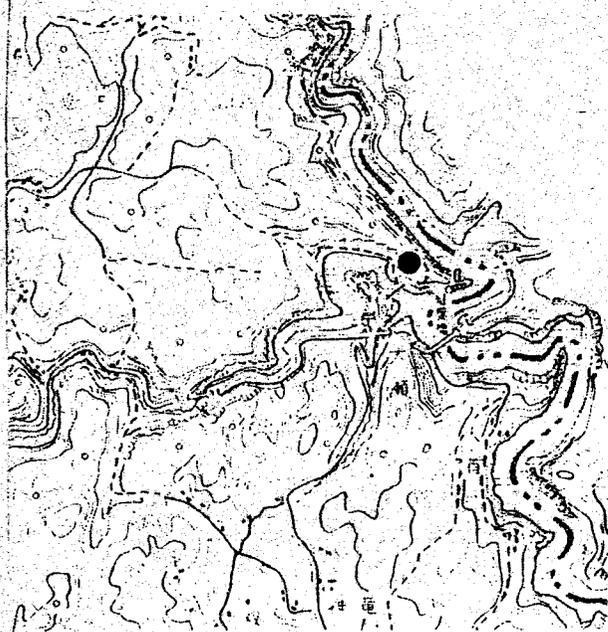
帝釈峽の入口にあり、俗に帝釈堂(本堂)の名で知られ  
る。真言宗醍醐派。石堂山麓見峰と号し、本尊は帝釈天。  
修驗寺院として長く栄えたが、明治五年(一八七二)真言宗  
となつた。和暦二年(一〇九)唐門の崩に神堂が降臨したの  
をのち現在地に移したとする説(四傳見峰の岩の上  
史)と、住古鬼嶺山に神堂が降臨したのを高見峰の岩の上  
に移したが、寛和二年(九八六)花山院の勅宣で翌年初めて  
伽藍を建立したとする説(高見峰通志)がある。  
年不詳の帝釈殿修造者加藤(部内前東)所収に石馬  
頭・知盛・以盛・三沢為虎・元親・新見少輔六郎元高・  
芸州之住熊谷元貞・木梨元盛・元勝の名があり、「芸藩通  
志」はこれを「曾石利の時の大名と見ゆ」としている。

村内夏森でとれる結晶質の石

# 八層城本丸を中心とした城の略測図

4-1  
(縮尺 1:1,000)





田辺系図(この系図は真疑不明)

敏達天皇 — 橘諸兄 — 広信 — 爲信(紀伊田辺庄住)

兼信(建武二年紀伊より備後国神石郡古川村へ来る平家子取) — 未渡 — 觀音堂と營む — 信貞 — 兼連 (市神庄と營む)

未広(安芸守)宮氏に仕へる未渡神田(殿)原と開墾し新聞の隅に未広  
 名(苗)荒神を祀ま。 — 利信(美依)子といふ。  
 未渡合戦で討死と思はれよ。  
 未渡(弟)田辺大崇宮と建立。  
 久代宮氏に仕へる未渡(弟)大崇宮と建立。  
 五十女と領す。

利信(美依字) — 未渡合戦で討死と思はれよ。 — 未渡(弟)田辺大崇宮と建立。  
 利広(稻葉美濃守に仕へる子といふ) — 勘七(国広) — 未渡(弟)田辺大崇宮と建立。  
 未渡(弟)田辺大崇宮と建立。

吉広(大隅守)怒守郡栗林へ移る。この伝承は比叟郡下、名家小倉屋と  
 似るといわれる。

この系図は宮利子についでまゝとせよとの混同といふ偽物と思はれる。

神石の権  
將國廣城  
を攻む

五、未破合戦

〔國廣城を攻む〕 天文二十年九月、可郡國廣城主田邊美作は同郡始終の城主田邊美濃の弟にして兄弟久代三河に仕ふ。是より先き美濃三河と良からず人を以て是を厄子に謂す。三河諱して是を知り美濃は罪せらるゝを恐れ妻子を連れて逃ぐ。美作は未だ是を知らざるに其の夜三河は長井田房介、神石の武將岡孫八郎、岡貞八庄、野次郎若林筑後に命じ三百餘人を以て國廣城を攻む。美作は其を張り將士酔ひて寝に就きしが城外尋常ならざる動靜にて夜襲を知る。其の妻急に甲を着せしめ兄美濃久代公に不下なりしかば屢々是を諫めしが昨日逃亡せり、必ずや兄に黨する故となし來り攻むるならんと云ふ。然れども今は分疏するも無益なれば死して證せんと、鬼橋源三起つて城門に至り敵を望むに弓銃を以て攻め寄す。源三壁を蹴し澗州に黨せざること、鬼神の知る處なり汝等は闇主に驅役せらるゝ處速に吾一箭を受けよと呼はり連射して二十餘人を斃し、身亦數創を蒙り又助からざるを知り屠腹し城柵より墜ちて死す。其の餘の城士力戦し敵兵醉易す。永井岡の二將來を昏して肉薄し岡は美作と組みて馬より墜ち遂に美作は殺さる。

(久代氏に仕へるとあるは後人の加筆なり)

## 乙女巖

おにはいしの東にあり。むかし帝釋天、唐門の嶺に天降り給ひし時、天乙女天降り舞ひ遊ひし故、乙女石と云ふ。一大石數峰嵯峨たり。是も橋立の架梁のはしならん。

## 備後沙

帝釋山より一里はかり此山續きにある一大石山なり。清湊(瀬)玲瓏たる事、譬ふるにもなし。其一大石をうがち取に大小塊となる、形皆八角となれり。試に一大塊をうち砕きみるに皆八角なり。是を砕きて盆右に用ゆ。水にさらして其光り猶潔白なり。坐上の一珍種なり。今、此沙石他に取り去る事を免さず、此山守あり。

## 千間窟

備後沙を産する山中なり。大巖窟なり。其深く入る事千間と云。しかれ共いつ是をはかりみしと言ふ事をしらす、巖若干かありけん。

## 未渡山、國廣城

## 田邊美作守

久代の臣、田邊五郎か子孫なり。始終の城主田邊美濃守舍弟なり。美濃守は久代三河守臣にて、先祖は官彈正左衛門尉利吉に従ひ來りし田邊五郎が末葉にて、譜代恩顧の臣なりしが、天文二十年の比、雲州尾子に内通し、三河守、毛利と内應し、大内に属せんと謀れり。久代を征伐あらば内應すへしと讒謀せし事顯はれて、久代より討果さるへしと聞へければ、妻子を引具し忍ひやかに何國ともなく逐電せり。美作守は、美濃守かよる事ありとはしらずしてありしが、久代より美濃守かよる企をなす條、兄弟同意たるべしと疑ひかより、何の札明もなく幕下組下たる田房の城主長井田房介、其臣岡孫八郎、同貞介、永野の城主庄、次郎元近、其臣若林筑後等に討果すべき旨命ぜらる。長井、庄、命をうけ、兩勢三百餘騎にて未渡國廣の城へ押寄せ、城を取圍み、夜半過る頃、城に近寄り關を作る。田邊美作守は此夢にもしらず、其頃聊か祝ふ事ありて終夜酒宴し、ほろ酔て前後もしらず伏居たるに、俄に郭外に關のこへ聞へければ、こは何事やらんと大に驚き騒ぐ所に、側によしたる女房の物馴たるが、枕元なる鐵取て打着せ、上帯引結びければ美作も心つき、此は此間美濃との佗行のよし風に聞しが、昨日の取紛れに其事聞れざりしが、乘て久代殿をさみせられしかは、佗行は定て雲州へ退去ありしか、兼々諫めつるものを聞入なく、今斯なるは兄の退去に疑かはれ、我を討果すべしとの事なるべし。今更申譯んとするとも聞入れあるまじ、我運命の盡る處ぞ、尋常に討死して其途の故主に

申譯せんと、靜に用意し打出んとしけるうち、女房は猶寐入たる者共を起しけるに、鬼橋源三と云ふ者起上り、目を握りながら中門へ走り出、四方を見廻せば、幡二流れ築地の下にみへければ、源三内へ走り入り、久代殿より討手向ひしと覺へたり、是は正敷、美濃守殿の科既に御身の上に懸りたり、召捕んとすと見へ候、此場に及び申譯も詮なし、寄手の者に一働して目をさまさせ、其後御自害あるべし、人々も太刀の目釘の續かん程、切ちらし、其後に腹かき切れと呼はつて、腹巻取て肩に打かけ、二十四さしたる籠(籠)に重藤(藤)の弓引提げ、門矢倉へ駆上り、狭間の板おしひらき、矢取て打つがひ、此程の小城に、ことごとくしうも大勢向ひ給ふ物かな、我等が弓矢の其加なり、其が弓の程を受けて御覽あれよと言ひさまに、忘るゝ程引絞たるを切てはなしければ、眞先に進みたる兵二騎射通され、申さしになつて俱に馬より落たりける。猶も多勢の中へ思ふまゝに射ちらして、二十餘騎射落しければ、其途の供には過分なり、今は是迄なりと弓、胡籠を櫓の下へ投げ落し、大音聲に言ひけるは、田邊が内に一騎當千と言はれ、毎度の軍に功名したる侍が自害するを見置て人に語れと呼はつて立腹切て其太刀を口にくはへ、櫓より眞逆に飛落て、貫かれてぞ死たりける。誠に鬼のふるまいなり。寄手多勢なりと言へども、思ひ切たる者共が、死物狂に引籠たる事なれば、切て入らんとする者なく、城を眺めて居るうちに、一族若黨數十人、物の具かため門の貫の木押ひらき、迎も遣れぬ命なりと、思ひ切たる事なれば、會釋もなく大勢の中へ無風になつて切て入り、面もふらす此を寂期と戦へは、寄手三百餘騎散々に切立られ、右往左往に亂れちる。寄手の將永井、庄兩人軍配取て下知して云、拙き者どもの有様かな、たとひ敵鬼神にもせよ僅の者共何程の事かあらん、引包み討取て高名せよと云ふ儘に、大勢一同に取てかへし戦ふに、田邊は去る大功の者なれば、向ふ敵を引請て切拂ひ突落し、ちいかに戦ひ味方をみれば、一族郎等は悉く討死し、其身も鎧に立たる矢七筋、みのもの如く折かけ三箇所迄重手負ひければ、今は是迄ぞ、自害すべしと引かへせば、岡孫八郎、同貞助、若林筑後、我討取らんと短兵急に追ひ來るを、得たりやと引返し、三騎の勇兵に渡り合ひ戦ひしが、岡孫八郎透を見て馳懸り、引組んで馬より下へ落けるを、おさへて首を掻落し、鋒にさし貫き、田邊美作守をば岡孫八郎が討取たりと呼はつて城に打入ければ、妻子共は城外に戦ふうち、後の山より落失せけり。空しき城を焼拂ひ、久代をさして引にける。此軍、小城なれども久代家にては珍しき剛戦なりし。是も田邊か勇功なり。

始終の城、一本古城記の説と大に異なり。不審の事ありと言へども、傳への儘に記し畢ぬ。可互考。

峡谷と遺跡

新緑や紅葉の帝釈峡

岩陰に残るじょう文遺跡群

神石郡神石町呉ヶ峠(たわ)から東城への道を車で三十分  
 余り走ると、目前に新緑にいろどられた峡谷が広がる。神  
 石町と比婆郡東城町の境にそって続く国定公園の帝釈峡で  
 ある。高梁川の上流の帝釈川が気の遠くなるような年月を  
 かけて石灰岩地帯を削りとつたのだ。毎年新緑や紅葉を求  
 めて多くの人がここを訪れる。また昭和三十六年帝釈峡馬  
 渡の岩陰から発見された馬渡遺跡は十数カ所の縄文(ヒ  
 ヨウモン)時代から弥生(ヤよい)時代にかけての道跡は  
 東城、神石、豊松の三町村にまたがり、帝釈遺跡群として

注目をあびている。現在も発掘が続けられている。

帝釈峡は北の上帝釈からの道をたどる方が便利だ。上帝  
 釈の入り口に「名勝帝釈川の谷」と刻まれた石の標柱が  
 立っている。その向こう岸には石雲山永明寺がある。百以  
 を越える絶壁の真下に桃山ふうのつくりの本堂がうすくま  
 っている。自然と人工との調和というより、きびしく、は  
 りつめた風景だ。永明寺は和銅二年(七〇九年)創立と伝  
 えられる古刹(こさつ)で、本尊はインドのヒンズー教の神  
 で仏教にとり入れられた帝釈天。帝釈の地名もここから起



自然美に富んだ帝釈峽（上帝駅）  
（断集溪）

こったという。

永明寺をあとに名物の巨大な水車のそばを通過してしばらく行くと、田

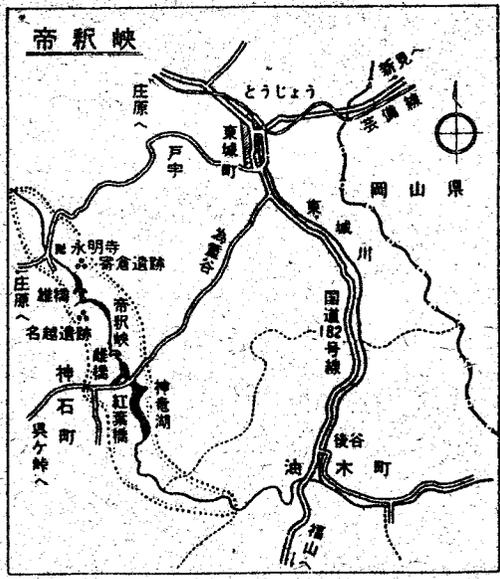


馬渡岩陰遺跡出土の土器  
(約一萬年前=帝釈郷土館)



寄倉遺跡出土の土器  
(縄文後期=帝釈郷土館)

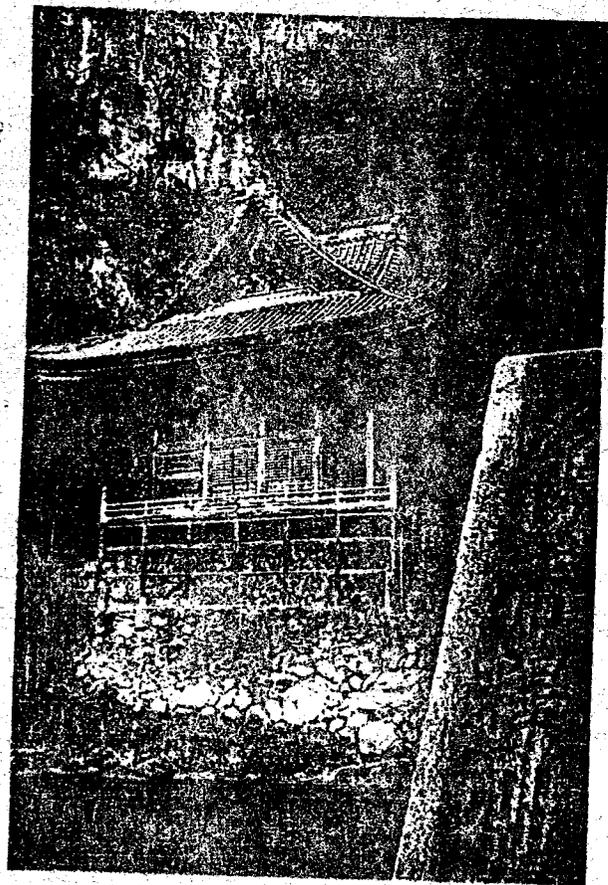
植え間近い田んぼの中にコシクリート造りで高床式の東城町立帝釈郷土館が見える。ここには帝釈峡一帯に住むけもの、鳥、こん虫、魚、陸貝などのほく製や標本のほか、付



近で使われていた民具などが展示されている。小田格一郎館長は「なかでも五十種におよぶ陸貝の標本は珍しいもの。日本の陸貝は約三百種といわれるが、そのうち七十余种が帝釈峡にせい息している。その中で「タイシヤクギセル」"カワシンジュガイ"については全国にも数少ないせい息地の一つ」と話している。また収蔵庫には帝釈峡遺跡

群から出土した縄文早期（一万六千年前）から弥生時代までの石器、土器、人骨などが展示されている。

この考古学上でも貴重な帝釈遺跡の発見は、ほんのちよ



上帝釈入り口にある古刹（さつ）石雲山永明寺

っとしたきっかけからだった。永明寺の村上誠竜住職は「山の村上さん」といわれるほどの山持ち。毎日植林したスギ、ヒノキの成育を見て歩いていた。昭和三十六年のあ

る日、村上さんは永明寺から二キロほど帝釈川をさかのぼり、林道工事中の馬渡に足をのぼした。風化したカワシジュガイを見つけた。当時帝釈中学の校長をしていた小田さんは貝塚（づか）かもしれないと思い、知人と共に現地に出かけ土器のかけらを見つけた。それは縄文早期の押し文土器だった。これがきっかけとなり、昭和三十七年、帝釈遺跡群調査団が編成され、馬渡遺跡を皮切りに奇倉、観音堂、名越など続々と新し



名越遺跡出土の人骨 — 帝釈郷土館

い遺跡が掘りだされた。

帝釈峽には石灰岩の岩壁を川の流れがえぐりつった岩陰があり、原始人にとって雨、風をさけるのに絶好の住居となった。こうした原始人たちの生活の跡が帝釈の岩陰遺跡群である。郷土館の裏手の寄倉岩陰遺跡には縄文早期から弥生時代にいたる約八千年にわたる長い年月のそれぞれの時代の層がはっきり残っており、保存のため樹脂が注入されている。——当時の人々は石おのや、やりでインシジ、シカを追い、帝釈川からは貝をひろい、岩陰にたくわえた火で獲物を焼き、暖をとった——。郷土館収蔵庫に並ぶ縄文晩期（三千—二千三百年前）のほぼ完全な男子の埋葬人骨（名越岩陰遺跡出土）や多くの土器、石器を見、寄倉岩陰遺跡の前に立つと、ふとこんな思いがよぎる。当時の人々にとっては美しいというよりきびしい自然だったろう。

原始の遺跡と別れ、新緑の枝がトンネルのように道を



尖頭礫・石ぞく（帝釈郷土館）

る。

急流の断魚溪を過ぎると間もなく神竜湖。帝釈川の流れをダムでせきとめてつくったこの湖は周囲二十四キロ、直立した岩壁が兩岸にそびえている。その自然の景観は神秘的だ。

おおう溪流ぞいの道をくだる。緑色に輝く陽光が水面にはえる。この道すじには鐘（しょう）乳石を見せる白雲洞、流れをまたぐ自然橋・雌橋など石灰岩地形特有の景観が展開す

# 帝釈峽の鍾乳洞

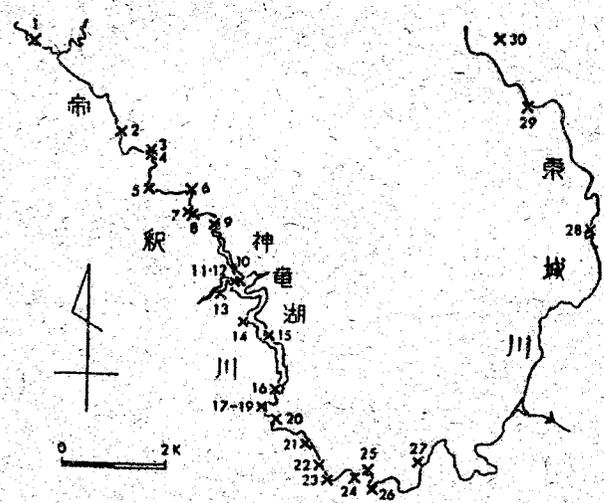


白雲洞の内部

まえがき

鍾乳洞は石灰岩中を地下水がえぐって造った洞くつである。日本にはおよそ二〇〇〇の鍾乳洞があるといわれている。西南日本の石灰岩台地には殊に多く見られ、秋吉台（秋芳洞、景清洞、大正洞など）、阿哲台（井倉洞、横洞、宇山洞など）、平尾台（風連鍾乳洞、小半洞など）などととも帝釈台も代表的な鍾乳洞分布地帯であり、天川洞、鬼の岩屋、白雲洞、素懸滝洞、一杯水など大小およそ四〇の鍾乳洞が知られている。

雄橋、雌橋なども鍾乳洞と同質異像で帝釈峽の名勝の多くは、鍾乳洞と関係あるものが実に多い。わが国で最大の鍾乳洞は岩手県安家洞で延長八キロメートルにおよび、深さでは新潟県青海の小穴で四〇〇



帝釈川・東城川ぞいの主要鍾乳堂分布図  
 1：鬼の岩屋， 2：賽の河原， 4：白雲洞， 5：雄橋， 9：雌橋， 15：半瀬のバク子穴， 22：便蔵穴， 23：天川洞， 27：鬼釜， 30：日切大師

メートル以深といわれ、堅穴では第一である。これらと比較すれば帝釈地域の鍾乳洞は規模は小さいものであるが、地学的には興味深い事実が多く知られている。

洞くつの深検をするのがケーピングと呼ぶスポーツで、日本では最近の十年間に急速な勢いで流行している。いっぽう、洞くつの科学的研究はまだまだおくれれているのが現状である。外国には洞くつ学（スベレオロジー）という学問が確立されているが日本ではようやく緒についたばかりである。

### 寄倉岩陰遺跡

広島県比婆郡東城町帝釈未渡

寄倉遺跡は帝釈峡谷の入口に近く位置する。遺跡の前面は帝釈川の蛇行によって形成された沖積地が盆地状にひらけており、岩陰は幅50m以上、高さ20~30mを計る帝釈峡谷遺跡群中最大の岩陰遺跡である。河床からテラスの頂部までの比高は14mあり、かつては岩庇がもっと張り出していた半洞窟の状態であったと考えられている。

この遺跡では、15の層序が識別され、中国地方で知られている大部分の型式の縄文式土器が層位的な関係を示して検出されている。観音堂洞窟遺跡の累層とともに他に類例を見ない遺跡である。

第1層(表層)からは平安・鎌倉時代の亀山式土器(岡山県)や、土師器、弥生式後期・中期土器が出土している。

第2層(縄文晩期)は、層が上部と下部に分かれる。下部出土の土器は器面がよく磨かれた黒色の精製土器と、凸帯文の粗製の深鉢形土器がある。

第3~6層(縄文後期)は、カワニナ、カワシンジュ、獣骨などが多量に出土しているが土器は少ない。第3層土器のうち巻貝で凹線をかいたもの(5図⑤~⑥)は、備前貝塚(岡山県)後期Ⅲ式と同形で、他に巻貝の扇状圧痕が付けられた近畿の宮滝式のもの(5図④)も出土している。第4層の土器は津雲A式(岡山県)が主体的とみられる(5図⑦~⑧)。第6層からは縄文中期から後期にかけての中間的特徴をもつものが出土しており、将来十分に検討される資料であろう。

第7・8層(縄文中期)は、貝殻や獣骨が多量に出ているが、土器は少ない。中期後半の里木Ⅱ式土器(5図⑨~⑩)や、太い沈線の文様が特徴的な(5図⑪~⑫)の

一群と、中期前半の船元式土器(5図⑬~⑭)も検出されている。

第9・10層(縄文前期)のうち、第9層からは彦崎前Ⅱ式(6図⑬⑭)、および羽島下層Ⅲ式(6図⑮⑯~⑰)が出土し、第10層では羽島式土器がまとまって出土している。

第11・12層(縄文早期)は、カワニナ、カワシンジュがわずかに混在し遺物も少ない。第11層の繊維土器は、菱根遺跡(島根県)で縄文早期として注目されているものに対比される(6図⑱~⑲)。12層からは繊維土器で、表面に大粒の縄文を施し、さらに幅広い結節のある沈線をめぐらすもの(6図⑳~㉑)が出土している。これは瀬戸内沿岸では類例のないもので、寄倉12層式と呼ばれる押型文直前の土器である。

第13層(縄文早期)は、下部から大粒の楕円押型土器が検出されている。馬渡第3層、名越第11層の土器と共通するもので、押型文形式では新しい様相を示したものである。

寄倉遺跡では、土器以外に各種の遺物が豊富に見られている。石鏃、石錘は数10個を数え、それは縄文期全般を通じて質的にあまり変化がない。石鏃は黒曜石製のものを含んで大部分が安山岩製である。大形の黒曜石スクレイパー(皮剥ぎ石器)が1点出土している。さらにアカガイ、ハイガイ、サルボウなどの海産の貝類と、それを材料にしてつくった貝輪がかなりの量発見されている。獣骨の出土量は尠大で、シカ、イノシシのほか数種類の小動物が検出されている。

人骨は縄文後期のものが50体出土している。それは岩壁に接して積み重ねられており、追葬・改葬によるものようである。縄文時代の葬制研究に重要な資料である。



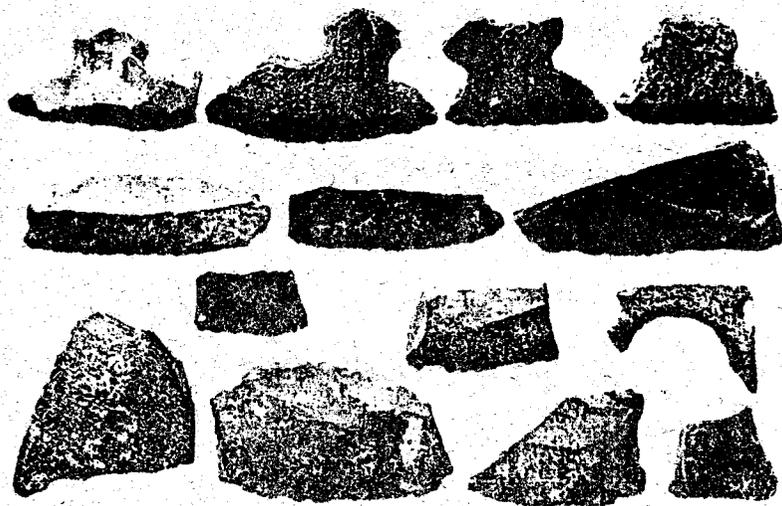
寄倉岩陰遺跡景観



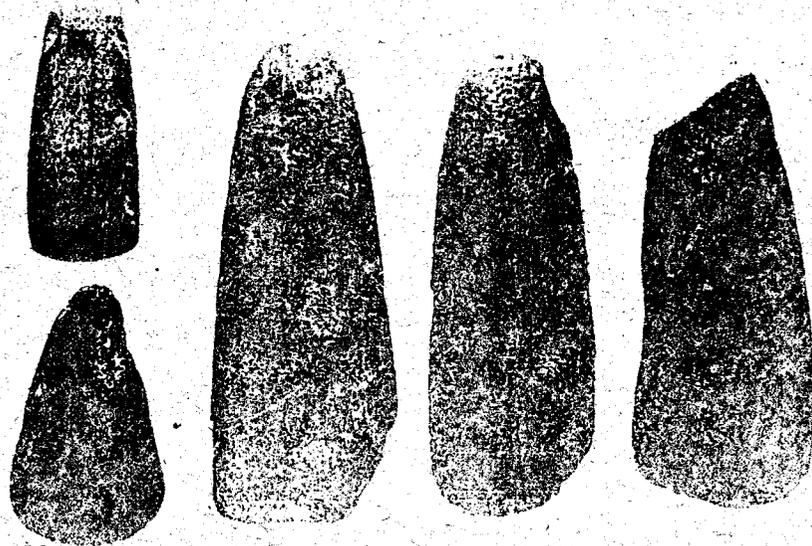
スクレイパー (石匙) 縦型 寄倉各層 (縄文時代)

石匙は縄文時代に特徴的で、また普遍的な石器。

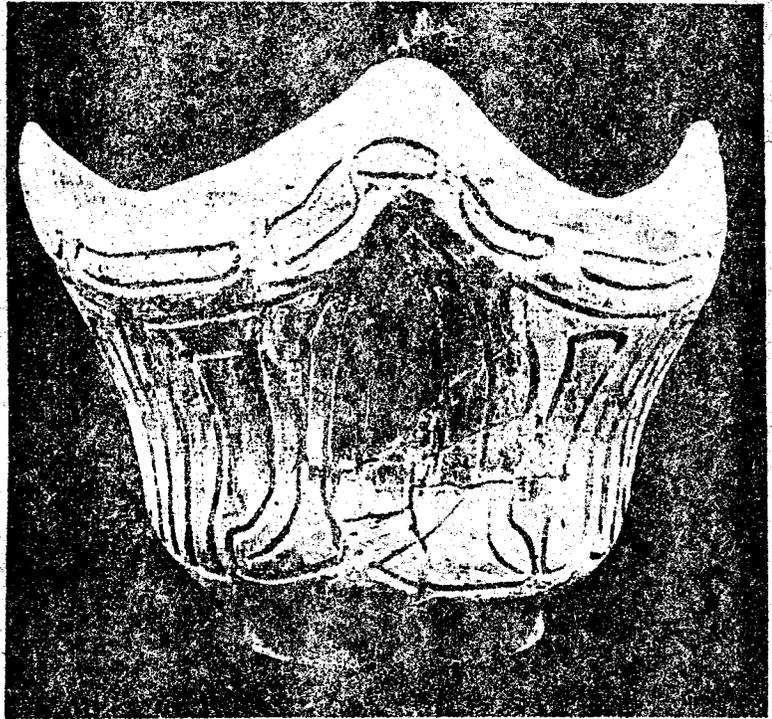
刃とつまみ状突起の角度によって縦型と横型とに区別されている。皮剥用として、あるいはナイフとして使われたもの。安山岩の打製石器。



スクレイパー (石匙) 横型 寄倉各層 (縄文時代)



石斧 寄倉各層 (縄文時代)



縄文式土器 鉢 (中津式)  
寄倉第5層(縄文後期)

人骨の出土状態 寄倉第40次A O区 (縄文後期)

寄倉岩陰では縄文後期の人骨が50体も出土した。しかも岩壁に接して積み重ねられており、追葬あるいは改葬がおこなわれたのであろう。

縄文式土器 甕 (里木II式)  
寄倉第8層 (縄文時代中期)



長さ七十五メートルの大石灰岩

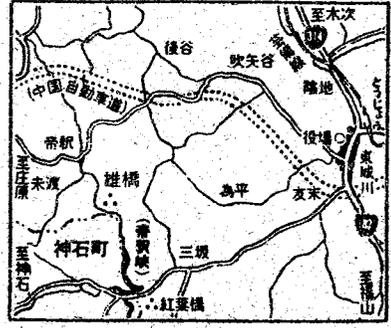


比婆郡  
東城町

学術的にも貴重な資料

帝釈川に架け渡された世界三大橋の一つ  
という「雄橋」は、さすがに国定公園帝釈

峽随一の圧巻。幅十八メートル、長さ七十五メートルの石灰岩で、見  
上げる人間を押しつぶすような重量感がある。帝釈天が、陰陽二鬼神  
を呼んで橋の架け比べをさせ、陽神の神通力で一夜のうちに完成した  
のがこの雄橋。雌橋は未完成のまま夜が明けたという伝説をほうふつ  
させる。地学的成因は、最初低い西側の上面を流れていた帝釈川が、  
河床の下に出来ていた鐘乳洞の天井が崩れ落ちたものといわれ、三百  
数十万年の歳月を経て出来た、カルスト地形の生い立ちを知る「生き  
証人」。学術的にも価値が高い。



落葉樹が茂る橋上に山道がある。明治末期に庄原―東城間の県道が開通して廢れるまで、東は東城町、岡山県の新見市、西は神石郡神石町、府中市への街道だった。付近には四国八十八カ所の札所のヒナ型があり、札所巡りや帝釈天の参拝者が往来した。この地方には病人が出る、必ず帝釈天のお札を枕元に立てる習慣があり、縁日には数万人の信者が集まり、ぞろぞろ通ったに違いない。

明治三十年には名越地区から、花嫁が馬に乗って、鞍に掛けた鈴の音を響かせながら備中の国へ。同地区の名医市岡元順も白馬にまたがって往診に、この橋を渡った。昭和初期になると、養蚕農家がカゴを背に桑摘みに。八、九千年前にも岩陰に住む日本人の先祖が往来したことだろう。

農業市岡善八さんは、母親から「橋の西詰めに、明治の中ごろまで茶店があった」とよく聞かされた。

現在の公園道は、中国電力が昭和二十九年にダムのカサ上げの代償につくった。「橋の下に車道を通せば一万年後に崩壊する」と、



県文化財専門委員の堀川芳雄氏（広島大学名誉教授）が車道建設に反対し話題となった。橋そのものは民有で、二人が橋の真ん中から二分して所有。国の特別天然記念物指定の申請も難航している。

永明寺  
市町民入  
所有

↑自然の橋がそのまま主要街道となっていた帝釈峽の雄橋

## 天然橋 雄橋

雄橋は日本の天然橋中の首位にあるものであり、世界の天然橋の中でも、最も勝れたものと云われている。

昭和四年版「名橋巡り」 畑中健三著  
にも日本唯一の天然橋として掲載されている。

雄橋は帝釈停留所から帝釈川に沿って下ること二軒、帝釈川を跨いで、東西に架け渡されている石灰岩の天然橋である。

橋長、七十五米、橋幅十八米、厚さ二十一米、橋下面から水面まで十八米、橋下には帝釈川の豊富な水流があり、両山は勿論橋上にも植物が繁茂している。この橋上には旧街道がある。大正初年頃までは、人通りの多い山道であった。眺めては天下の奇橋であり、渡れば重要な山道であった。帝釈は僻地でありこの名橋も今日まで世の中に知れ渡っていない。

## 架橋の伝説

不思議な石橋、どうしてこの橋が架けられたか。人間業では出来ない橋である。こんな時に、神の造化、鬼神の工作と考えられる。雄橋も神の作ったものと考えられた。

## 一、天の浮橋説

伊邪那岐、伊邪那美の男女二神の御子ふさわず、事の由を、天の神に申して、靈産を受けようと、二条の天の浮橋を登ることとされた。伊邪那美神は御子がふさわないので、急いで天に昇ろうとされ、あわただしく雄橋を昇られた。女神が先きに昇られたので、天の神の怒に触れ、天の浮橋は忽ちに崩れて、一つは大仙となり、一つは未渡御神山となった。その時の天の浮橋の軸が雄橋・雌橋となったのである。

## 二、鬼神架橋説

昔未渡御神山に陰陽二鬼神がいた。この鬼神は乱暴で、土民がさんざん苦しめられていた。これを聞いた帝釈天が、鬼神を呼びよせて、

神通力で一夜の中に石橋をかける様申し付けた。陽鬼は雄橋、陰鬼は雌橋を造ることにした。一夜明けると雄橋は見事に山から山へと架け渡されていたが、雌橋は時間切れで中断していた。雌橋は雄橋の下流二軒の地にあり、片方だけ山に架った中途半端な形である。

## 地学的成因

伝説は架空なもの、科学的に橋の成因を考究しなくてはならない。古い時代には、帝釈川が現在の河床より遙かに高い位置を流れていた。雄橋は東が高く西が低い、この西側の低い上面を帝釈川が流れていた時代があった。その頃河床より下に鐘乳洞が出来ていて、帝釈川が鐘乳洞の中を流れるようになった。その後鐘乳洞の天井の部分が崩落し、雄橋の部分だけが残ったのであると考えられている。更に今後研究が進められることであろうが、現在では以上の様に考えられている。

## 雄橋眺望

川上から眺めると、一枚の石灰岩壁が垂直に立塞がっている。橋と云うよりも、岩壁と云った方が適當と思える。その下部が、虹状に列り取られて、帝釈川を吸い込んでいく。

橋下に立って見上げると、幅十八米の橋腹が、がっしりとした橋脚に支えられ、帝釈川を跨いでいる。

川下からの眺望は最も橋らしい容姿を示すもので、斧さくの跡も鮮かに、神技の妙を盡し、円形の橋下には遙かに帝釈の山々が見渡される。橋上には自然林が生い茂り春夏秋冬、夫々の趣をそえる、まことに日本一の奇橋の実を顕現している。

橋下よりの眺めもさること乍ら、一度橋上の旧街道に登り、俯瞰すれば、十三丈の眼下に帝釈川の清流が杏な水音を発している。冷汗三斗と云うが全く肝を潰す壮观である。坂谷朗蘆の詩の一節に、

「鬼橋を渡らざれば奇を説く勿れ。」

全く奇橋の面目躍如たるものがある。

## 芸藩通誌記載の神橋（文政八年）

帝釈川の下流にあり、南岸皆山にて、それに跨れる、天然の岩橋なり、長さ二十三丈四尺、幅三丈二尺、橋脊より、水際まで、高さ十三



明治30年版 芸藩地理歴史挿絵

川下より望んで左岸に山道があった



四つうじに立てられた家かうのはしの石欄

丈、そのうち、橋身厚さ七丈八尺、橋腹より五丈二尺ありといへり、実に鬼神の造作せるところなれば、昔よりかく名付け初めしなるべし。神の訓かうとも読むなり、神代をかうじろと読む類にて知るべし、今他の字を用ふるはあらず、此の川下三十町許、神石郡相渡村に雌橋といへる岩橋ありて、中一間許断へたり、土俗の説に、上古鬼神ありて、一夜に、この二橋を作るに、彼は陰鬼、是は陽鬼の作れるか、雌橋は未だ成らずして、夜明けぬといえり、この神橋の脊には、草木も生い茂りてあれば、知らで行く人は、尋常の山路ともおもうべきか、橋下にくだりて橋腹を仰げば、一枚の石にて、いかにも刀撃もて、削りなせるがごとく、高く架し渡せるを見て、神工の妙に驚きぬ、誠に奇絶といふべけれど、僻郡にあるを以て、いまだ天下に著れ聞えず、近

芸文に見えたり。俳人風律が純句に、「雁守や、ここは橋やら、山路やら、」橋上のありさまをよく言い出せるなり。

### 雄橋街道

橋上に古い山道がある。大正末までの長い間、この橋は人通りの多い歩道橋であった。西は相渡、呉ヶ峠、東は宇山、東城、備中へ通じる幹線道で、東詰には小堂があった。この堂は真言宗永明寺にぞくしていた。帝釈は帝釈天をまつつてある永明寺を中心とし、信仰の地として参詣者が多かった。雄橋の下にも石地藏が祀られ、河原の石が積みあげられていた。川向いにも石地藏がある。西の電光形の山道の中程には、小さな茶屋があり、道行く人の休み場であったと伝えられている。

東城―庄原間の県道は、明治末年に開通したもので、それまでは、谷尻までは細い山道がついていたが、谷尻から川沿いには道らしいものはなく、僅かに樵人の通る、いたち道があったに過ぎない。一本堂から鞍掛岩までは大岩壁で道がつけられず、丸木橋がかかった危険なものであった。

橋も丸木橋や板橋であったから、洪水があれば、流れてしまう。唯雄橋だけが河面から十八米の高度をもった、石橋であったためこの橋が交通の主要橋となっていたのである。現在も山道の分岐点に道標があり、往年の交通を物語るかの様に、雑草の間に残っている。

古の俳人風律が、

雁守や、ここは橋やら、山路やら

と感嘆しているが、おそらくこの雄橋道を旅した時に、天然橋の雄大に心をうたれて詠んだものであろう。雄橋は十八米の堂々たる石橋で、人が通るだけではなく馬も籠も通った。

雄橋名越に市岡元順と云う医者があった。大正十一年、七十二歳で

没しているから、母注から大正初年にわたり活躍していたと思われる。明治中期ごろ、綿織のはなれに長満と云う医師が居たと云うが、居付の医者ではなかったようである。市岡元順は医師十三代にあたり、先代からの知り合いも多く、帝釈一円、相渡方面の往診をしていた。勿論宇山方面へも往診した。元順はいつでも馬に乗って出掛けていた。宇山へ行くには雄橋道だけであり、乗馬姿の元順が、幾度となく雄橋を渡ったものである。現在帝釈には馬車馬が僅かに一頭だけであるが、大正末年までは沢山の馬が飼われていて、乗馬用、荷役用にされていた。元順が往診していた明治、大正頃は、毎年、雄橋道の「道なおし」をしてきた。医者の通る道を立派にしておかないと、病気になる時に困ると思つたためである。従つて道なおしも入念にされたので、歩道としては立派なものだったと云う。

現在は宇山の戸数も大幅に減少した。雄橋の東に、「神の橋」と云う部落があり、三戸の民家があったが、現在は一戸もない。庄原東城間の県道が開通して以来、人も車も皆県道を通る様になり、雄橋街道は過去のものとなつてしまった。

明治三十年、帝釈名越から、備中へ嫁入りした。この時も雄橋を渡つたのである。馬にのつた花嫁を先頭に、両掛、箆、長持ちなどが続いた。長い嫁入りの行列が雄橋を渡つたのである。馬の鞍にかけた、鈴虫の鈴の音を響かせながら、静かに雄橋を渡つたのであった。

雄橋は眺めて天下の奇勝であるばかりでなく、かつては主要街道として栄えた歴史をもつものであり、日本第一級の名橋であると同時に世界の天然橋中の白眉でもある。

東鑑合編

【矢不立城】 庄ノ三郎元近、同次郎の磨。  
 大戦冠録足二十世の孫庄權守廣高より出づ。廣高の男太郎家長は源平一の谷の戦に、東門の將平重衡に迫り其の馬を射る、馬倒る、重衡白刃せんとするを家長組伏せ生擒にす。其の褒賞として奥州宝地の庄並に備中草壁の庄を賜り于孫備中に移り住む。其の後裔元近沼隈郡山手村江良谷奥に在る嶮峰長峯城に移り暫く居りて當城に來る。庄ノ次郎は天文二十年奴可郡久代三河に屬し同郡國廣城田邊美作守を攻め敗れり。一説には此處より山手村に移れりともあり。

### 国境の二本松峠

幾山河こえさりゆかば淋しさの

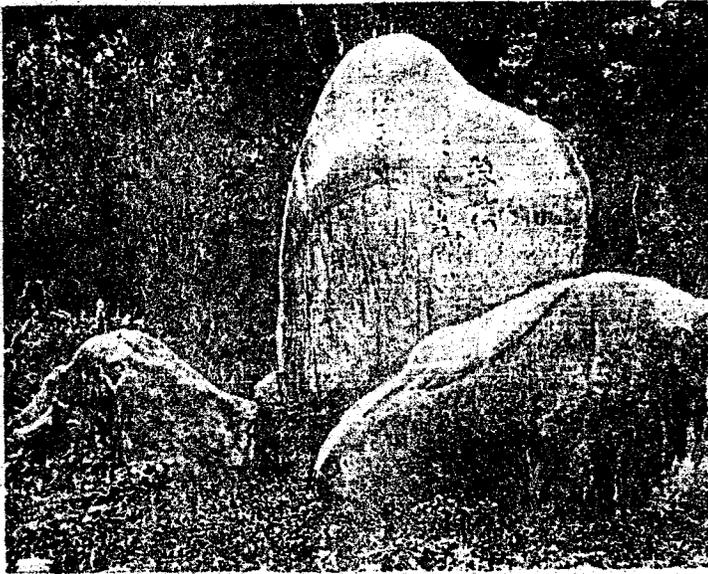
はてなん国ぞ今日も旅ゆく

牧水

旅するものにとつてまさに絶唱であろう。若山牧水の若き日に、即ち明治四十年六月二十三才の初夏に一人中国路を旅したとき、岡山県の備中から二本松峠をこえて備後国に入ってきて、その茶屋に泊ったときの歌とされていたが、今はここに復原された。

後年牧水の妻喜志子もおとすれ、牧水の歌碑のそばに「あくがれの旅路ゆきつつ此処にやどり、この石ぶみもうたは残して」と歌碑をそえている。

幾山河の歌が出てくる歌集の中の「別離」には、「峽



二本松峠にある若山牧水の歌碑

縫いてわが汽車走る梅雨時の雲さはなれや吉備の山々」というのがあって、吉備の山峽を兩山から藪井まで汽車にゆられて、それから徒歩で新見に入り、ここ二本松峠の茶屋に泊って、更に安芸に出て宮島での歌がつづいて

いる。  
今は新しく国道一八二号線が、この峠をさけて山麓を通り、峠のいただきの道をはさんで二本あった老松も一本は枯れ、国境をまもる「御番所」も殿家に建ちかわり、わずかに敷地の石垣にそれと知られるのみで、街道の面影はうすれ、通る人影もなく、時折、牧水の歌をしたう人が歌碑を訪れるのみである。

この峠のいただきに立っていたはずの「従是西、備後国」「従是西芸州領」と刻んだこの備中本街道の道標もどうしたことか東城町の町なかにある徳了寺の境内に移されていたが、今はここに復元された。

国境の道しるべといえば、双三郡布野村から島根県にこえて赤名峠の国境に立っていた「従是南芸州領、従是南備後国三次郡横谷村」の標石も今は横谷の八幡社に移され、一方は寺に、こちらは神社と役目をはたしたいこ

いの姿をのこしている。

芸州藩はこうした領内から国境をこえて走る主な街道には必ずこの「従是」の道標をこまめに立てている。昔の旅人はここでとどめられ番所役人に調べられて、通交手形を所持している者のみが出入国を許可されたものであろう。

国境とも気づかず、ぶんぶん車でぶっとぼす世の中では、道標は道巾をひろげるさまたげともなつて姿を消していったのであるが、この文字が頼杏坪の書とか頼山陽が書いたものと伝えられているところにも昔をなつかしむ人の想いが深く刻まれて寺社の境内に止められているのであろう。

参考文献

西備名区、神石郡誌、比婆郡誌、  
早良の今昔、備後路、備北散策、  
帝釈文化、広島県史の地名、  
帝釈使羽穴窟遺跡

島根一